

# ここはリビデオライブラリー 視聴のてびき

- 第1話 盲導犬と歩く
- 第2話 ミュージカルへの挑戦
- 第3話 やりたいこと模索中
- 第4話 ケアホームそよ風と虹の家

## は じ め に

2007年の秋から冬にかけて、私たちは、4本のビデオを撮りました。しょうがいのある人の暮らしを知りたい、それが目的でした。

シナリオもなく、決まっているのは取材対象だけでした。ぶつつけ本番の一発撮りばかり。それぞれ2時間あまりの映像を8分程度に編集しました。

そんなビデオですので、こんなふうに見てほしいというものがあるわけではありません。しょうがいのある人のぶつつの暮らしを切り取った、これらの映像から、みなさんがそれぞれに、気づいていただけるものがあればうれしく思います。

ぜひこのビデオの上映会を開いていただき、みなさんで気づいたことを話し合っていたいただきたいと思います。この「視聴のてびき」は、そのような上映会の際の話題提供の材料になればと考え、作成しました。

また、お声かけいただければ、私たちが上映会のお手伝いをさせていただきますので、ぜひご連絡ください。

2009年3月

## 第1話

# 盲導犬と歩く

### ◆ ポイント

- ・ 目の見えない人と盲導犬の歩き方を知ろう。
- ・ 目の見えない人の危険を知ろう。
- ・ 盲導犬とあつたときの注意事項

### ◆ 進行例

みなさんは、盲導犬を知っていますか。

そうですね。盲導犬は、目の見えない人が町を歩くときのお手伝いをします。

目の見えない人が、町を歩くととってもあぶないです。  
あぶないだらうなと思うこと、みんな、言ってみて。

目の見えない人と盲導犬が、どんな様子で、町を歩いているのか見たことがありますか？

ない？ あんまり、ないよね。

実は、小牧市の人口は、15万人ぐらい。15万人の人が住んでいて、その中で、目の不自由な人はどれくらいいると思う？

こたえ。だいたい200人です。200人の中で、盲導犬を飼って、利用している人は、何人だと思う。

こたえは、ひとり。つまり、小牧市には、盲導犬が一頭しかいないんだ。

これから、そのたった一頭の盲導犬の仕事ぶりをみんなで見てみよう。盲導犬を使っている人は、玉置（たまき）さんといいます。

あとで、問題、クイズをだしますから、よく見てね。

### <ビデオ上映>

はい、どうでした？

では、問題をだします。第1問。

さっきの盲導犬は、おすか、めすか、どっちだ。

はい。おすですね。ブレイブくんってっていたから。

では、第2問。

玉置さんは、けっこう、すたすたと早く歩いていましたね。みんなは、目が見えなくて、どうしてあんなに早く歩けるのか不思議じゃなかった？  
どうして玉置さんは、道がわかっているんだろう。

そうだね。頭の中に、地図が入っているって言ってたね。なんとか歩いて、どのくらい歩いたら左に回ればいいのかとか、頭の中に入っているんだね。

第3問。その玉置さんが最近困っていることは何だったでしょう。

そう。町が、道路の工事をして、きれいに作り直しているので、頭の中の地図と実際の道路が違ってきているんだね。知らないで歩いていたら、とっても危ないよね。ほんとうは、こういう工事をするので道路がこんなふうに変わります、ということを、目の見えない人にはあらかじめお知らせして、危なくないように説明してあげないといけないですね。

第4問。喫茶店に、盲導犬といつしよに入ろうとしたんだけど、なんか、盲導犬の様子が変わったよね。すぐくぎこちなくて、えー、ここにいくの？

というような感じでした。その場面のことを玉置さん自身が説明していました。どういってましたか。

そうですね。いつもは、散歩に行くときちゅうにお店に入っているのに、道を左がわにまわってお店に入っていたのに、この日は、散歩の帰りにお店に入ろうとしたので、歩いている右がわにまわることになって、盲導犬は、あれ、いつもと違う、どうして?と行ってしまったのでした。

犬が、道を知っているわけではないのです。

じゃあ、信号はわかると思う?

犬は、信号がわかりません。では、どうしているかというと、目の見えのない人が合図をだしているのです。

目の見えのない人が、周りの人や車のようすから、周りの車が止まれば渡り出すように盲導犬に指示を出します。

こういう話を聞いたことがあります。

ときどき、信号待ちをしているとなりの人が、信号無視をして赤でも渡ったりすると、目の見えのない人も間違えて渡ってしまい、とつても怖い思いをしたことがあるそうです。

信号待ちで、盲導犬と一緒に歩いている人や白い杖を持っている人がいたら、思い切って声をかけて、「今、信号は赤ですよ」とか「今、青になったから渡れますよ」と教えてあげるといいですね。

いま、たとえば、私たちが信号無視を気軽にしてしまうことが、目の見えのない人を危険な目にあわせることになるんだということをいいました。ほかにも、私たちが知らず知らずに、目の見えのない人を怖い目にあわせていたりします。

目が見えていたら、さつとよけられるかもしれないけど、歩道をさつと走り抜ける自転車は、目の見えない人にとって、とっても危ないですよ。すれ違いざまに、荷物などがこすれたりして、知らないうちに、目の見えない人の腕が傷つけられていたということも何度もあるそうです。

最後に、盲導犬とあつたときの注意をいっておくね。

盲導犬を利用する人が、安全に歩くために、つぎのことは決してしないでください。（財団法人日本盲導犬協会のホームページから）

- ・ 盲導犬に声をかけたり、じつと前から見たり、口笛をならしたりしない。
- ・ 食べ物を見せたり、あげたりしない。
- ・ 盲導犬をなでたり、ハーネスを触ったりしない。
- ・ 自分のペットと挨拶させようと近づけたりしない。

それから、もし玉置さんとブレイブくんを見かけて、お話ししたいと思ったときは、ブレイブくんに声をかけるのではなくて、玉置さんに声をかけて、安全な場所に移動してからお話しするようにしてくださいね。

## 第2話

# ミュージカルへの挑戦

### ◆ ポイント

- ・ダウン症について知る。
- ・しょうがいを「個性」と見るみかた
- ・しょうがいがある人がいることでお互いが変わるということ

### ◆ 進行例

これからいっしょに観るビデオは、小牧に住む19歳の女性が、ミュージカルに挑戦している様子をうつしたものです。

みんなは、ミュージカルを知っているかな？

舞台上で演じる劇なんだけど、劇の中で、たくさんの歌やダンスがあります。

まだ一度もミュージカルを観たことがないという人は、これから大人になってからでもいいけど、ぜひ一度は観てほしいな。

女性は、中山真希さんといいます。真希さんは、ビデオを観た後で説明するけど、ダウン症というしょうがいを持っています。真希さんは、ミュージカルの魅力にひかれて、自分が演じたいと思って、毎年市民ミュージカルに参加してがんばっています。

ビデオは、10分あります。

ビデオの前半は、真希さんが一生懸命に練習をしている様子が映っています。

ビデオの後半は、その真希さんが入団したときからの先輩である森山さんという人が、真希さんのことについて、質問に答える形で話してくれています。ちょっと難しいかもしれないけれど、よく聞いてほしいと思います。

どんなことを聞いているかということをお先に言っておくね。

1つ目は、真希さんはしょうがいを持っていますが、いっしょに練習をするときに心がけていることは何ですか？と聞いています。

2つ目は、真希さんがメンバーにいていて、困ることがありますか？と聞いています。

3つ目は、逆に真希さんがメンバーにいていて、何かいいことはありますか？と聞いています。

そして最後に、真希さんと関わった6年間に、真希さんは変わりましたか？と聞いています。

森山さんという先輩が、どんな答えをしたのか、後からみんなに質問するのでよく聞いてくださいね。

### <ビデオ上映>

はい、どうでした？

それでは、ビデオを観る前に言っていた質問のまえに、ちょっとクイズをだしますね。

中山真希さんは、しょうがいがありますが、どういう名前のしょうがいでしたか？



そうですね。ダウン症です。

みんなは、ダウン症という名前を聞いたことがありますか？

わりと、多い（少ない）ですね。

みんな知っているとおり、赤ちゃんは、お父さんの精子とお母さんの卵子が合体して生まれてきます。

生まれてきたわたしたちは、ひとりひとり違います。背が高いとか、目がぱっちりしているとか、手先が器用とか、絵が得意とか、体が柔らかいとか、そのほかにもまだまだいっぱい、違いがあるよね。

そんなひとりひとりが持っている違いのことをどういいますか？

そうですね。「個性」といいます。このように生まれつきの「個性」もあるし、後で身につく「個性」もありますよね。

オリンピックの選手なんかは、生まれつき才能を持って生まれたのでしようけれど、才能だけではオリンピックには出られない。才能だけでなく、努力して厳しい練習をしてきた時間があるから、オリンピックの選手になれたのですね。

ここにいるみんなも、もって生まれた個性だけで、今のみんながあるのではないですよ。生まれてから何年かのこれまでの生活で、みんなどんどん変わっています。

生まれるときに、男であるとか女であるとか、ある程度決められてしまうこともあるけれど、人生いろいろあって、お父さんに叱られたり、お母さんにほめられたり、友だちといつしよに遊んだり、もつともつといろいろながあって、人はどんどん変わっていきます。どんな個性を持った人

に変わっていくのか、変身していくのか、それは誰もわかりません。

さて、話をダウン症のことに戻します。

私たちは、生まれつきの個性、つまり遺伝情報を伝える染色体というのを46本持っているそうです。46本は、ばらばらの46本じゃなくて、お父さんの精子が持っている23本の染色体と、お母さんの卵子が持っている23本の染色体が、それぞれ合体して23本×2で46本になっています。

その染色体が合体するところで、何かのきっかけで1000人に一人の割合で、2本組みの染色体が3本組みになって受け継ぐ場合があるそうです。

ダウン症というのは、そういう染色体の個性をもって生まれた人についてつけられた名前です。

ひとりひとり違うのに、なぜか日本人は日本人に見え、欧米人は欧米人に見えるように、ダウン症の人はダウン症の特徴があります。なんとなくダウン症のひとみたい、とわかつたりします。

ダウン症の人は、知的な発達がゆつくりだったり、心臓の病気をもっていたりする傾向があるけれど、日本人全てが同じでないように、ダウン症の人の発達の様子も体の特徴もいろいろです。

念のためにですが、遺伝情報を伝える染色体の数がダウン症に関係していると聞くと、ダウン症は遺伝するのだと思ってしまいそうですが、そうではありません。

染色体が合体するときに、1000分の1の確率でおきる事件なので、どの染色体の合体のときにおきるのかは、誰にもわかりません。

さて、それでは、ビデオを観る前にお願いしたこと。森山さんのインタビュー、よく聞いてくれたかな。ひとつひとつ、森山さんの答えを確認するよ。

1つ目は、真希さんがしょうがいをもっていますが、一緒に練習するときに心がけていることは何ですか？と聞きました。

この質問に、森山さんはどう答えていますか？

はい、そうですね。「わたしは真希ちゃんがしょうがいをもっている人だとは考えていません」って言っていましたよね。真希ちゃんがダウン症であることは知っているけれど、それだからといって、特別なことはありませんということですね。

この感覚ってどういう感じでしょうか。これは、想像なんですけれど、きっと森山さんも最初のこと、真希さんはダウン症の子、しょうがいのある子ということで接していたと思うんですね。でも、ずっと付き合っているうちに、なんだ、いつしよなんだ、違わないんだ、と思ったのではないのでしょうか。

ミュージカルが好き・・・いつしよだ。一生懸命練習する・・・いつしよだ。うまくできたときはすごく喜ぶ・・・いつしよだ。

うまく説明できないけれど、そういう「いつしよだ」という気持ちがふえてきて「しょうがいのある真希ちゃん」というふうには思わなくなったのではないのでしょうか。

2つ目の質問は、困ることはないか、ということでしたが、森山さんはどう答えていましたか。

ときどきパニックになってしまうことがあるけれど、それも、しばらくすればおさまりますから、とっていましたね。

それに、真希ちゃんは必ず本番までに練習して作ってきますから、ともいっていましたね。

うまくできない、みんなができていのに自分はまだできない、というような気持ちでワーツとパニックになって大声を出すことがあるかもしれませんが、でも、そんなとき、そっとしておくとはしばらくは騒いでいるかもしれないけれど、自分で折り合いをみつけ、立ち直ってくるから、見守っていればいいと、森山さんは気づいたんですね。きっと他のひとたちも同じように気づいて見守っていることにしたんだと思います。

こんなふうに、周りの人がどうすればいいのかがわかると、最初は困ったことになっていたパニックも、そうたいして困ったことでもなくなったのだと思います。どうすればいいか気づくには、時間がかかるかもしれないけれど、時間をかけてわかり合いたいと思って、つきあっていくと、こんなふうになれるんですね。

3つ目は、逆に真希さんがメンバーにいることで、何かいいことはありますか？と聞いています。森山さんは、どんなふうに答えていたのでしょうか。

すごく大切なことをいっていたと思うのですが、ミュージカルをみんなでやるとき、うまく作りあげたいということばかりになりがちだけれども、しょうがいのある真希さんといっしょにミュージカルを作ることで、それだけでない大切なことをみんなが知ることができるといっていました。

つまり、ミュージカルは、みんなが一つになって作り上げるもの、ということ。真希さんがいることで、うまく作り上げるということよりも、みんながひとつになって作り上げることの方が大切だということ、みんなが

知ることができたということです。

そして最後に、真希さんと関わった6年間に、真希さんは変わりましたか？と聞いています。

その答えは、どうでした？ 6年前というと、真希さんは13、4の頃です。そのころ、自分のことだけでいっぱい、いっぱいで、頭を抱え込んで、人からこうしたらいいよといわれても耳を貸さなかったそうです。それが、いまは、人の言葉をすなおに聞けて、ずいぶん大人になった、ということです。

人は成長します。人によつては、そのスピードは違い、ゆつたりとした成長をする人もいます。みんなも、クラスの中に、あの人いやだ、嫌いだと思う人がいるかもしれないね。でもね、何年かたってあつてみるといいやつになっているかもしれないよ。相手も変わるし、自分も変わります。

森山さんへのインタビューは、打ち合わせもなく、当日その場での問いかけだったそうです。いきなりの問いかけへの答えですので、飾るところのない本心からの言葉だと思いますが、ステキな答えでしたね。

## 第3話

# やりたいこと模索中

### ◆ポイント

- ・ 脳性麻痺（のうせいまひ）についての簡単な知識を得る。
- ・ 身体に障害のある人にとってのバリアについて考えてみる。
- ・ 障害は、社会の側にある、という視点を学ぶ。
- ・ 障害のある人への支援の方法について考える。

### ◆進行例

さて、これからみてもらうビデオの主人公は、吉金伸高（よしかねのぶたか）さんといいます。小牧市に住んでいます。

吉金さんは、このビデオのときは、30歳でした。吉金さんは、脳性麻痺（のうせいまひ）があります。

脳性麻痺とは、様々な原因で生じますが、胎児期（お母さんのお腹にいる頃）や乳幼児期（赤ちゃんの頃）に、脳の運動神経（身体を動かす神経）が傷ついて、運動麻痺（自分の意思で身体を自由に動かせない状態）が生じた病気、とされています。

脳性麻痺は乳児1000人につき2～4人の割合で起こります。出生時体重が非常に少なかった乳児には特に多くみられます。

脳性麻痺の人の特徴は、不随意運動といわれるものです。もちろん、人によってその程度や症状が違いますが、脳からの体の筋肉への指示命令が思いのとおりにならず、硬直したり、手足の動きがぎこちなかったり、それ以上に、まったく思いのとおり動かなかつたりですので、歩けないで車いすの利用者もいます。

ことばも、聞き手が慣れるまで、聞き取りにくいことがあります。脳に受けたダメージによって、知的な障害など他の障害も重複する人があります。

病気といいましたが、脳に障害を受けたその結果の後遺症を脳性麻痺と言っているので、「治る」ということはありません。さらに、その症状は進行しませんので、悪くなるということもありません。ただし、人に手伝ってもらわずに自分でやらないといけないと考えて、がんばりすぎると、障害がより重くなり、若いときは歩けていたのに、だんだん車いすでないと動けなくなったりします。このことを、脳性麻痺の二次障害といいます。

さて、吉金さんのことに話をもどしましょう。

このビデオでは、吉金さんがどんな暮らしをしているのか、障害のある当事者として、どんな思いをもっているのかを取り上げています。

障害のある人が、私たちと同じような暮らしをするのには、いくつもの、いくつものバリア、壁というのがあります。その壁を取り除いていくことをバリアフリーといいます。このビデオを通して、バリアフリーということを考えてもらいたいと思います。

では、見てください。

#### <ビデオ上映>

はい、しっかり見てもらって、ありがとうございました。

まず、吉金さんがやってきたのは、「デイサービスひかり」、というところ。です。

「デイサービスひかり」は、さまざまな障害のある人が日中活動を行うところ。です。作業をしたり、地域社会で生活するためのルールを学んだり、

お金の使い方などを勉強したりしている人もいますが、障害の重い人たちも家族以外の人と安心して過ごせる場として、友だちや職員と色々な活動をしています。

それから、吉金さんは、車に乗っていましたね。車に乗れるんです。きっと免許を取るのはいへんだったろうなと思うのですが、吉金さんも運転免許を持っています。

でも、みんな、気づいたかな。免許だけではだめですね。車が違っていたでしょう。普通の車は、両手でハンドルを握って、足でアクセルやブレーキを踏むようになっています。吉金さんの車は、吉金さん用に、改造されています。

ハンドルは、右手だけで操作ができるようになっています。アクセルとブレーキは、左手で、レバーで操作できるようになっています。障害のないことを前提に作られた車は、障害のある人にとっては、バリアがある、ということになります。でも、障害のある人にあわせて車を作れば、バリアがなくなるのです。これもバリアフリーの一つです。

車のことでいえば、車いすマークの駐車場のことについて、話していました。どんなふうに言っていましたか？  
障害のない人が、車いすマークのところにとめるのはやめてほしいと言っていました。

車いすマークの駐車スペースは、たいがいスーパーなどの入り口の近くにありますが、近くにあるだけではありません。それだけじゃない違いがあること、知っていたかな。ビデオの中にヒントがありました。

そう、幅がずっと広いんだよ。それは、車いすを利用している障害のある人の中には、助手席に車いすを乗せていて、降りるときには、運転席のド



アをいっぱい広げて、助手席に乗せていた車いすを降ろして、車いすに乗り換えます。普通の駐車場だと、ドアを広く開けられないから降りられないのです。これも、障害のない人のことを前提に作られた駐車場は、バリアがあるといえます。そして、車いすマークのスペースは、バリアフリーの取り組みなんです。車いすマークのスペースに平気でとめちゃう人は、バリアフリーの取り組みをだいなしにすることなんです。

ここで、ちょっとみんなに考えてもらいましょう。

みんな、街のなかで、車いすの人に対してバリアフリーの工夫をしているなと感じるところ、あげてみてください。

工夫の例：スロープ、エレベーター、エレベーターの中のボタンの位置、エレベーターの中の鏡、車いす用トイレ、自動販売機のボタン・商品取り出し口・・・

目の見えない人から聞いた話ですけど、どんなところにこまりますかと聞くと、たとえば、銀行に行くと、いま ATM の機械でタッチパネルになっていますね。画面の「引き出し」「預け入れ」と書いてあるところを押して操作しなくてはなりません。目の見えない人にはできません。それから、個室トイレに入ると、トイレによって紙のある場所、水を流すレバーやボタンの場所や形状がちまちまです。これが目のみない人をなやませるそうです。

なかなか気づかないですよ。時には、目が見えない、耳が聞こえない、歩けないなど、いろんな障害のある人の立場になって、この街の様子をみてもみることもやってみましょう。

私たちの気づかないでいることに、障害のある人にとっては、とっても困ることがあるのです。私たちにしてみれば、「気づかなかつた」で済んでしまいますけど、障害のある人自身にとっては日々大変なことなんです。

先ほど例からわかるようにバリアフリーの取り組みを進めれば、バリアはなくなります。このことから、障害は、障害のある人自身にあるのではなく、社会の側にあるという考え方もあります。社会の側が変われば、障害のある人の負担は軽くなっていきます。

さて、最後に、吉金さんが転んだときのこと話が話題になっていました。吉金さんは、転んだときに、周りの人から手をだして引き起こされることについては、どういってましたか？  
そうですね。自分のペースで立ち上がりたいから、手をださないでほしい、って言っていました。

障害のある人が困っている、すぐ助けなきゃ、って思うのは、とつてもやさしくて、大切な気持ちです。でも、もう一步つつこむと、障害のある人の立場でどうしてほしいかを考えることが大切だと思います。  
障害のある人の立場で考えるといっても、実際に障害がない人にとっては想像もできないことが多いものです。そうしたら、どうしたらいいのでしょうか。

障害のある人自身に、どうしてほしいか、聞くのが一番ではないでしょうか。

「だいじょうぶですか？」「私に手伝えることはありますか？」  
こんなふうには、まずは声をかけて、障害のある人自身にどうしたらいいですか、と尋ねるようにしたいですね。

きょうは、どうもありがとうございました。

## 第4話

# ケアホームそよ風と虹の家

### ◆ ポイント

- ・ 知的なしょうがいがあるということ、介助ということを学びます。
- ・ ケアホームについて学びます。
- ・ ケアホームで、障害のある人が暮らしている様子を知ります。
- ・ 日中活動の場としての作業所での仕事ぶりを知ります。

### ◆ 進行例

いまから、みていただくビデオは、ケアホームというところで、しょうがいのある人たちが暮らしている様子取材したものです。

先にビデオを観てもらってから、みんなでビデオの内容について話し合おうと思います。

### <ビデオ上映>

このケアホームで暮らしている人は、知的なしょうがいのある人で、中には、体も不自由な人もいましたね。

知的なしょうがいのある人は、もちろんしょうがいの程度の軽い、重いはあるのですが、知的なことが苦手です。知的なことが苦手というのは、おおざっぱな言い方かもしれませんが、算数とか国語とかの勉強が、とても苦手といってもいいと思います。大人になっても苦手なのです。

ちよつと考えてみると、算数ができないと買い物が難しいし、国語ができないということは漢字が読めないなので、私たちが説明書きや看板表記を読んで動いていることができないことがあります。

知的なしょうがいのある人は、一度も行った経験のないところ、たとえば、名古屋港水族館に一人でいって遊んできてください、といっても、たぶんできないと思います。

まず、名古屋港水族館に行くのにどうしたらいいかわかりません。行き方を教えてもらっても、初めての駅で切符を買うこと、どの電車に乗ればいいのかを知ること、トイレがどこにあるかすぐに見つけることなど、少し考えても算数と国語の力がないと大変そうなことはたくさんありますね。

でも、お手伝いする人がいたらどうでしょうか。名古屋港水族館までいっしょに行ってくれて、駅の切符売り場で、買うべき切符を教えてくれて、切符販売機の操作を教えてくれて、どの電車に乗るかも教えてくれて、トイレにもいっしょに行ってくれる人がいれば、水族館もいけますね。

しょうがいのある人のお手伝いをすることを介助といいます。介助の介の漢字は、「助ける」とか「補佐をする」とかという意味をもっています。

しょうがいのある人は、介助、つまり、お手伝いがあれば、みんなと同じように水族館に行って、楽しむことができますね。

はじめに言ったけれど、しょうがいには程度があります。しょうがいが軽度の人だと見守っていてもらうだけで大丈夫という人もいますし、身体なしょうがいも重複していて車いすでないと移動できなかつたり、食事のお手伝いとかトイレのお手伝いも必要な人もいます。

まったく日常の暮らしはできて、工場で働いているという人もいますけれど、お金の計算ができないので、アパートで一人暮らしまでは、できないという人もいます。

みなさんは、これまで、しょうがいのある人がどこで暮らしているかを考えたことがありますか？

しょうがいのある人は、水族館に行くことだけでなく、毎日の暮らしでもお手伝いがいります。

もちろん、みなさんと同じように、お父さんやお母さんといつしよの家で暮らすという人たちもたくさんいますが、しょうがいが重いといろいろとお世話が必要になります。

あるいは、その自身のしょうがいがそんなには重くなくても、家族が高齢になつたり、先になくなつたりして、しょうがいのある人のお手伝いができなくなってしまうときがあります。

介助を日常的にしてもらう人がいないとき、これまでは、「施設」にはいることになりました。病院のような大きな建物に、50人とか100人というたくさんの人がいつしよに暮らします。そこでは、職員さんが朝から夜まで世話をしてくれます。

みなさんは、たとえば部活動で合宿していると思えば、施設での暮らしを想像できますか。楽しいじゃないかと思うかもしれませんが、毎日毎日365日、10年、20年と続くと思ってみてください。

毎日同じ時間に起こされて、同じメンバーでプライバシーもないし、毎日先生が面倒をみってくれるけどだんだんそれもうるさくなってくるし、ご飯はあらかじめ決められていて、きょうはカレーを食べたいなと思ってもそうはいきません。

自分の家で暮らしていると、お母さんに「カレーが食べたい」と頼むと晩ご飯がカレーになつたりするけれど、施設の暮らしというのは、いつも職

員さんのお世話があるので安心だけれども、そういう点で窮屈な暮らしでもあるのです。

家族は高齢になってずっと世話ができなくなったり、あるいは先になくなったりしても、ちゃんと介助できる人が地域にいれば、施設にはいらずに、これまでと同じような暮らしができるということで、はじまったのが、さつき、観てもらったケアホームです。

もともと、4、5人のグループで世話人さんといっしょに暮らす仕組みをグループホームと呼んでいましたので、ケアホームは、グループホームと言われることもあります。グループホームのうち、ちよつとしょうがいの重い人が入っているのが、ケアホームと考えてもいいです。

ケアホームは、しょうがいの重い人に配慮した建物を新しく建てて使う場合もありますが、すでにたっている一軒家を借りて、ケアホームにしてしまうこともあります。

つまり、ケアホームは、しょうがいのある人が仲間といっしょに暮らす家なのです。世話人さんという人がいて、世話人さんがご飯を作ってくれたり、家事をしてくれませんが、しょうがいのある人自身も、掃除をしたり洗濯をしたり、自分のできることは自分でやります。

部屋も全員が個室です。

そんなふうにして、夕方から朝まではみんなで過ごすのですが、昼間はどろするのでしょうか。どこにもいけなくて、家にごろごろしているのはつまりません。

大人だから、働きたい、仕事をしたいということがあります。そこで、ビデオでみたように、作業所について、働きます。

ビデオに登場するみなさんは、段ボールを扱って、それぞれの仕事をしつかりされておりました。ビデオに登場するみなさんにとって、昼間を過ごす場所は、あの作業所なのです。

みなさんのお父さんは、毎日どんなふうにご暮らしておられますか。夜はみなさんと一緒にご過ごしておられますね。昼間は会社に行きます。そのほか、土日には買い物にいったり、みなさんをつれて遊びにご出かけたり、あるいはゴルフに行ってしまうかもしれません。

しょうがいのある人にかぎらず、夜寝るところ、昼間過ごすところ、それにプラスして、余暇活動などの場面が必要です。

ビデオで、ある人が、「土日でもケアホームにいたい」とおっしゃっていました。実は、このケアホームでは、作業所がお休みの土日の昼間の時間を過ごすお手伝いしてもらえぬ人が確保できないために、土日には実家にかえってもらっているのです。

現在、多くのケアホームではここと同じように、土日には家に帰ってもらっているようです。ケアホームで暮らす人々を応援する人が、もっともっと必要だということなのです。

みなさんは、すぐには、世話人などにはできないかもしれませんが、たとえば、土日でもケアホームのみなさんが名古屋港水族館に行きたいと思ったときに、手伝ってあげることが出来るかもしれませんね。そんな機会があったら、ぜひみなさんも応援してあげてください。

## ここばりビデオライブラリー VOL.1

### 視聴のてびき

発行者 ここばりこまき

〒485-0811 愛知県小牧市光ヶ丘1-1-4-403

E-mail mail@kokobari-komaki.net

FAX 020-4622-5783

ここばりこまき どっとねっと

<http://kokobari-komaki.net>

ここばりビデオライブラリー配布事業は、平成20年度小牧市市民活動助成金（はじめの一步部門）の助成を受け実施しました。